

パンデミックを契機とする新時代に発行された
ミドル・レベル教育の新指標
— *The Successful Middle School: This We Believe* (2021) に着目して —

岡村千恵子・岡村慶

高知大学学術研究報告 第71巻
抜刷 (2022)

パンデミックを契機とする新時代に発行されたミドル・レベル教育の新指標
— *The Successful Middle School: This We Believe* (2021) に着目して —

岡村千恵子¹・岡村慶²

(¹ 京都外国語大学外国語学部・² 高知大学教育研究部総合科学系複合領域科学部門)

A New Index for Middle Level Education
Issued in a New Era Triggered by the Pandemic
— Focusing on *The Successful Middle School: This We Believe* (2021) —

Chieko Okamura¹ and Kei Okamura²

¹ *Kyoto University of Foreign Studies, Faculty of Foreign Studies;* ² *Kochi University,
Research and Education Faculty, Multidisciplinary Science Cluster, Interdisciplinary Science Unit*

Abstract: In 2021, in the midst of pandemic spreading, the latest edition of the *This We Believe* series, *The Successful Middle School: This We Believe* (hereafter referred to as *This We Believe* (2021)) was published by Association for Middle Level Education (AMLE). In its publication, AMLE has set out a new index, so-called new guidelines, for the success of middle level education. It is an update from the 2010 counterpart. The 2021 index describes 5 essential attributes and 18 characteristics.

In this article, we refer to some materials from *This We Believe* (2021) to deepen our understanding of the psychology, emotions, and states of mind that are unique to middle level students (young adolescents aged 10 to 15). Then, we will attempt to analyze and organize the conceptual framework of middle level education for a new era, as indicated by the new index published in 2021.

キーワード：ミドル・レベル教育, 10–15歳の若者, 教育改善のための指標, 新しい時代, 好循環

Keywords: Middle Level Education, Young Adolescents Aged 10 to 15,

Index for Education Improvement, New Era, Virtuous Cycle

1. はじめに

2020年初頭、世界中に拡大した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の大流行、パンデミックは、今日いまだ人々の生活に日々不安と苦難をもたらしている。この問題の発生以降、わが国でも学校生活や社会生活は大きく様変わりした。コロナ禍における最も大きな変化の一つとしては、IT技術を用いた画面を通してのオンラインでの対話や集会が急速に発達したこと、それを背景にして人同士の接触機会が大幅に減少したことであろう（注1）。学校や社会では常にマスク着用在当たり前となり、直接人同士が対面している場合でも、お互いの表情が十分に見えない状態での意思疎通が今日なお強いられている。このような事態は、子どもの脳の発達や心理的な発達に悪影響を及ぼす可能性があるとの指摘もある。しかし、この長期にわたるパンデミックによって人々は新しい状況への対処や適応を迫られることになり、その結果、これまで疑うことのなかったさまざまな価値観や感覚が揺さぶられたことも確かである。

社会を揺るがすこのような時代の移り変わりの中で 2021 年、ミドル・レベル教育協会（Association for Middle Level Education；以下、AMLE）によって、往年から定期的に版を重ねられてきた、*This We Believe*（注2）シリーズの最新版『成功するミドル・スクール—私たちの信条—』（*The Successful Middle School: This We Believe* 以下、*This We Believe*（2021）とする。）が出版された。AMLE は、その中でミドル・レベル教育を成功へ導くための新指標（注3）を打ち出した。この新指標では、*This We Believe*（2021）の直前の版である 2010 年に出版された『私たちの信条—青少年期の子どもたちを教育するにあたって大切なこと—』（*This We Believe: Keys to Education Young Adolescents* 以下、*This We Believe*（2010）とする。）において公表された教育概念の大部分を引き継ぎつつも、時代の転換点を見据え、新しい視点を盛り込むことで、さらにバージョンアップした教育概念枠組みを提示している。それは、新しい時代に即応したミドル・レベル教育改善のためのガイドラインの更新と見なすことができる（注4）。また、最新版 *This We Believe*（2021）の内容構成の特徴の一つは、実在するミドル・レベルの生徒への積極的アプローチを行なっていることである。*This We Believe*（2021）では、ミドル・レベルの生徒を理解するための資料として、実在する生徒たちが自らの心の内を表現した詩や感想文を数多く引用している。

本稿ではそうした資料に基づいて、ミドル・レベルの子ども（10歳から15歳の子ども）特有の心理や感情、心の状態について改めて理解を深めると同時に、パンデミックを契機として 2021 年に発行されたミドル・レベル教育改善のための新指標では、どのような方向性をもって何が目指されるようになったのか、また、これまでと比べ何が変わったのかという点に留意しつつ、新しい時代を見据えたミドル・レベル教育の概念枠組みの分析・整理を試みる。

2. 長期化するパンデミックの現況とミドル・レベル教育のこれから

世界保健機構（WHO）が、COVID-19 をパンデミックとして宣言してからほぼ 2 年半が経過し（注5）、この長期化するパンデミックによって世界では今なお、感染者数が日々蓄積されている。WHO によれば、2022 年 9 月 20 日現在の COVID-19 の感染者数の状況は、全世界で 6 億件をはるかに超えることが確認された。また、同じ時点で、全世界の死亡者数は、650 万件を超えている（注6）。COVID-19 がもたらす疾患や死の脅威、そして感染防止策による生活変容によって、人々は大きなストレスを感じ続けている。「児童や青年は長期間の学校閉鎖と在宅生活、外出自粛などの非日常的な生活がこの 2 年半繰り返されてきた。児童や青年の周囲にいる保護者や家族、教員をはじめとする大人への影響もまた、児童や青年の生活に影響を及ぼしている」（注7）。コロナ禍の初期において児童・青年の身体活動が少なくなったことは、子どもたちの心や精神の健康に悪い影響を及ぼす可能性があることはすでに指摘されているが、コロナ禍、パンデミックが長期化することによる人々

のメンタルヘルス（精神保健）への影響もまた、さらに深刻であることが懸念されている。とりわけ心身の発達が目覚ましい児童・青年期における心や精神の健康の悪化は、成人とは異なり、彼らが成長した後の教育レベルの低下につながることも示されている（注8）。

AMLE は、このような深刻な事態をミドル・レベル教育の専門機関の立場から次のように受けとめ、*This We Believe*（2021）の序論（Introduction）（注9）において緊急提言的な文言が述べられた（注10）。それは、全世界の教育関係者に向けての励ましの言葉であると同時に、パンデミックという苦境を教育者たちが自ら乗り越えようと努力してきたことに対する敬意の表明、教育者たちへの共感の言葉として受けとることができる。

ミドル・レベル教育協会（AMLE）の基盤を成す趣意文書（ポジションペーパー）である、この出版物（注11）が発行されている矢先に、私たちのコミュニティは多くの学校の建物を閉鎖するという感染症の世界的な大流行に直面しました。そして、こうした問題が発生している間に私たちは世界中のミドル・グレイドの生徒たちが日常的に直面する不平等にひと際、光を当てることで人種的不公正や社会的不公正を目撃してきました。

また、この逆境にもかかわらず、ミドル・スクールの教育者たちが、生徒の生活と将来に深遠で前向きな影響を与えている、数えきれないほど多くの力強い事例を私は見てきました。このように、今の時代は不確かかもしれませんが、ただ一つ確かに言えること、明らかなことは、ミドル・スクールの教育者たちが、生徒との間に強固な関係を築き、若い青年（注12）の独特の性質とアイデンティティに応答的に接し、導いていく学校環境を構築することに熱意をもって取り組むとき、教育者たちは必ず成功する一確実な手応えをつかむことができる—ということです。今から40年ほど前に、この趣意文書が最初に出版された当時の基本原則は、今日に至ってもいまだ差し迫ったものであり、かつてと同様、重要であることに変わりありません。

この出版物の中で述べられているように、「ビジョン（見通しをもつ）とは、可能性を見極める鋭い感覚です」。応答性が高く、やりがいがあり、力を与え、公平で、魅力的なミドル・スクールを創り上げていくことに熱意を傾けることを、あなた方、皆様にお勧めします。また、私たちにとってかけがえのない、若い青年を称え（名誉と思い）、尊重し、評価し、彼らが大きなアイデアや人生の浮き沈みと格闘するのを助ける、大人の擁護者にあなた方、そして私たち自身になることを願ってやみません。最も重要なことは、私たちの生徒、私たちの学校コミュニティ、さらには彼らを取り巻く世界に何ができるかについて想像をめぐらすことであり、あなた方が私たちの仲間となつて、そうしたあらゆる活動にも参加されることを願ってやみません。

ステファニー・シンプソン CEO

3. ミドル・レベル教育の好循環を目指して：関わる大人たちに対するケア

This We Believe（2021）の序論では、以上のように、世界中のミドル・レベル教育の関係者を視野において敬意と共感、ねぎらいの意を表現した激励の言葉が述べられている。ミドル・レベルの生徒たちと直接かかわる教師、教育関係者がパンデミックという突然の危機に直面して仕事上の悩みを抱えて孤立することがないように、この出版物を通して AMLE という組織の存在を世界中の人々に知らせ、ともにミドル・レベル教育の改善に手を携えようと呼びかけているのである。こうしたメッセージに触れ、落胆や絶望から立ち上がり、望みや希望を取り戻す教師や教育関係者は全世界に多数いるにちがいない。

いかなる実践においても、次なる改善のステップを目指すためには、前向きな姿勢と肯定的な評

価、プラス志向の期待は不可欠である。それに加え、他者との前向きな協同や連携があれば実践者はいっそう励まされる。生徒中心主義的な教育の重要性が当然視される昨今、現場のあらゆる現実条件を変えないまま、教師が厳しい評価を受ける、あるいは、教師に過重な責任や負担が押し掛けるといった問題も増えつつある。そうした問題の背景には、個々の教師の職務上の孤立化・個別化、教師が所属する職場や組織内の協同不足・連携不足などがあることが考えられる。そうした現実を踏まえると、日々前向きに取り組む教師に対し、温かい眼差しと仕事理解について伝えることは重要といえる。*This We Believe* (2021) の序論は、何よりもまず、教師たちに励ましを伝え未来を切り拓くための「導入」となっている。教師の仕事といえば、自らのケアはさておき、個々の子どもたちの学習指導や生活指導、さまざまな配慮に追われ、自らの内省に時間を割く余裕や、同僚と仕事上の意見交換をする機会もないままに多忙な仕事を日々こなすというルーティーンにはまりがちである。しかし、そうした教師たちが個人個人で自己管理している多岐にわたる業務と固定化された職務軌道の見直しを図ることの重要性が、*This We Believe* (2021) の序論では示唆されている。まず、現場の教師はもとより、子どもと関わるすべての大人たちを励まし、ミドル・レベル教育に携わるすべての大人の意識改革から着手することで好循環を形成していこうというのである。つまり、こうした好循環こそが、結果として、子どもの学びの改善、成長の支援へと繋がっていくという一つの論理が *This We Believe* (2021) には鮮明に貫かれている。このような改善と支援のサイクルへの期待は、この機会に、改めて世界中のすべてのミドル・レベル教育の現場で確認されるべきであろう。長期化するパンデミックに誰もが不安や苦難を抱えている今日、好循環を生む、励ましを起点とするプロセスやサイクル創っていく教育改善の方法は、新しい時代を展望する上でのえてある。AMLE は *This We Believe* (2021) を通して、ミドル・レベル教育に関わるすべての大人を励ますことで、新時代の教育のあり方を実践的に例示しているといえる。

4. 等身大のミドル・レベルの生徒とは—ミドル・レベルの子どもの特徴と傾向

教師や大人たちがミドル・レベル教育に関わる上で、予め、前向きなサイクルを創っておくことが重要であることについては、先に述べたとおりであるが、では、教師をはじめとする大人たちが、その次に着手すべきことは何だろうか。それは、彼らが日々向き合う子どもたちについて本質的な理解をしておくことに他ならない。ともすれば、問題行動や非行にも結びつきやすい年齢期ともいえる「ミドル・レベルの生徒」とはいったいどのような存在なのだろうか。ここでは、ミドル・レベルの生徒そのものの姿、等身大の姿について *This We Believe* (2021) で提示されているいくつかの資料を取り上げて解釈する。

まず一つ目の資料、*This We Believe* (2021) の序章の前段、一ページをカンヴァスに見立てたかのように、ミドル・レベルの生徒（一人の少年）の姿が描画イラストによって表現されている（注13）。描画の少年の名は、「ムハメッド A.」, 7年生（注14）の生徒である。描画の少年は、ミドル・レベルの生徒らしくラフな服装をしており、一見、どこででも見かけそうな13歳の少年である。描画の少年は、明るく快活な様子というよりは、どこか憂鬱そうな表情に描かれている。そして、彼は今大きな夢をもっているという。描画の傍らに添えられた短い文章（以下、「添え文」とする）には、この少年に関して次のような記述がある。

大きな夢

私（注15）は、この描画で、彼が自分の将来に想いを馳せ、きっと何かを成し遂げようと夢見ている一人の青年を表現した。彼は大きな夢をもっている。そして彼は人生の目的を達成するために最善をつくすことにいつも前向きだ。彼はきっと、自分の力でどうにか

して成功を修めることができるにちがいない。だから、彼は自分の学校と自分の家族には、自分のことを信じ誇りに思っていてほしいと願っている。

このように、描画と添え文には、13歳の少年の等身大の姿が描き出されている。13歳の少年といえ、夢に向かう意欲と未来への希望に溢れる存在といえるだろう。しかし、そうした希望や願望は、彼の中で力強い確固としたものとなるときもあれば、漠然とした弱々しいものへと変化するときもある。それは、彼の周囲にあるもの、周囲の出来事に影響されながら、その時々によって姿・形を変えるととっても過言ではないだろう。13歳の少年は、自信に満ち溢れる瞬間もあれば、何かささいなことをきっかけに、悲観的になったり自虐的になったりもする。描画と添え文が表現しているのは、そうしたミドル・レベル特有の少年の姿である。それは、前向きな心理状態を基調としつつも、移ろいやすい不安的な心理傾向といえる。「大きな夢（プラス志向）」対「不安・憂鬱（マイナス志向）」という、この両極端な心理の緊張関係こそがミドル・レベル期を過ごす生徒たちの特有の感情や心理の特徴である。「ミドル・レベル」とは、10歳から15歳の青少年期を指す言葉であるが、より一般的な言葉で表すならば、「思春期」（注16）と呼ばれる時期とも部分的に重なり合う。思春期の特徴の一つとして「両価性（アンビバレンツ）」（注17）が強まることは心理学や医学の知見から指摘されているとおり、描画の少年の年齢期はこの両価性がとりわけ強まる時期といえる。

この両極端な二つの心理の間をシーソーのように揺れ動く等身大のミドル・レベルの生徒の姿は、次に取り上げる、6年生、「ローヤ P.」が書いた詩（注18）にも表れている。

最初に学校へ行く日

ローヤ P. （6年生） 作

最初のあの日

学校の玄関ホールは、混み合っていて騒がしい

君は、まったくの一人ぼっちだ

そして、君はただ一つの場所を見つけたかった

その場所とは、所属することができる場所

等身大の君自身になることができる場所

そこでは、何の心配もいらない

たとえば、君が何を言おうと、君が何をしようと、君がどんなふうに見えようと、

それで十分なんだ

しかし、今回、あの玄関ホールでは決して何も起こらなかった

というのは、今日、

たとえ、あの玄関ホールが今回もまた混雑して騒がしいとしても

君はやはりここにいる誰のことも知らないのだけれども

この学校では、誰もがお互いのことを大切にするんだ

君に声をかけ挨拶をすることを恐れる者は誰もいない

君にこの学校の内部を案内してあげよう

君に微笑みかけよう

そして、君には居場所があることを示してあげよう

なぜならば

君は
今のままで
十分だから

アメリカでは、エレメンタリー・スクール（小学校）が5学年で修了する場合、それに続く学校は通例、6-8学年制のミドル・スクールである。よって、この詩を書いた6年生のローヤは、エレメンタリー・スクールを卒業してミドル・スクールに入学したばかりの生徒であることがわかる。ローヤの詩は、ローヤが初めてミドル・スクールに登校した日の、未知の学校生活、未知の学校空間に対する測り知れない不安や恐れを表現している（注19）。

ローヤの詩から、その心理・感情がどのようなものか、より入念に抽出してみよう。まず、詩の第1スタンザにおいて、学校初日、自分という存在が新しい環境で「まったくの一人ぼっちである」という孤独感、不安感、緊張感が語られる。この時のローヤの緊張はいかばかりか。それは、ローヤの受け止めが深刻になればなるほど不安や緊張は高まるものであり、最高潮に達した場合には、ある種の恐怖感にさえなりうると解釈できる。そして、一人ぼっちであると感じる背景には、学校の玄関ホールの人混み、行き交うたくさんの生徒たちによる喧騒という状態がある。一人ぼっちの心細さは、少なくとも（注20）、見知らぬ大勢の生徒たちが入り混じる様子に圧倒され過敏になっているローヤの心理状態から引き起こされている。この詩に登場する「君」（ローヤ自身であると思われる一人の新入生；以下、ローヤとして解釈）は、そうした不安、緊張、孤独な状況において、まずは安心できる居場所を見つけたいと願っている。所属できる場所、等身大の自分で居られる場所、心配や不安から解放される場所、ひいては、安全地帯、避難できる場所、自分をまるごと受け止めてくれる場所を強く探し求めている。しかし、学校という現実場面において、行き交う他の生徒たちがもたらすざわめきや騒音は不安を増大させるばかりである。そこに居合わせる不特定多数の誰かとどのように関わればよいのか、見当もつかないほどの極度の不安・緊張にローヤは苛まされている。

さらに、第2スタンザ以降、ローヤの詩は次のように展開される。第1スタンザでの不安、緊張、孤独感は、まるで幻想であったかのように表現される。ホールに行き交っていた他の生徒たちの人混みに圧倒され、不安と孤独感に打ちのめされそうになっていたローヤだが、第2スタンザ冒頭では、「今回、あの玄関ホールでは決して何も起こらなかった」と安堵感・安心感の感情へと移り変わっていく。今日も学校の玄関ホールはいまだ混雑し騒がしい。ローヤはここを行き交う誰のことも知らないけれども、この学校では、誰もがお互いを大切にする、この学校は（きっと）そういうところなのだという理解、ひいては安心感に至っている。これは、ローヤの周囲で何か小さな快い出来事が起こったことによるものと思われる。

そして、第3スタンザでは、その安堵感はさらに具体的な言葉と行動によって表現される。「君に声をかけ挨拶をすることを恐れる者は誰もいない／君にこの学校の内部を案内してあげよう／君に微笑みかけよう／そして、君には居場所があることを示してあげよう」と学校内で他の誰かと自然と関わるきっかけを発見できた、前向きな心持ちや期待の言葉が紡ぎだされる。そして、詩の最後には、「なぜならば／君は／今のままで／十分だから」という等身大の自分の姿が肯定される。この詩全体を通して、ローヤは自分という存在を過度に意識していることがわかる。また、自分が他者から肯定されるのか否定されるのか、そのことが気掛かりで仕方なく過敏に心が揺れ動いている様子がわかる。

以上、ローヤの詩から、次の6点の特徴を抽出することができる。①絶えず揺れ動いている不安的な心理傾向（否定と肯定、悲観と楽観の両極を揺れ動く）、②自分と他者との関わりを構築するこ

とへの困惑，③自分が何者であるかという問題についての絶え間ない探求と葛藤，④自分が他者からどう見られているかに関する過剰反応，⑤等身大の自分，ありのままの自分が他者から肯定されることへの安心・安堵，⑥安心できる居場所（安全地帯や避難場所）の探求と必要。

ここでは、ローヤの詩をローヤの心理や感情として解釈したが、このように揺れ動く心理・感情はミドル・レベルの生徒の誰もが日常的に抱く一般的な心理的傾向といえるだろう。ミドル・レベル教育に携わる教師や大人は、生徒たちが日常のごくありふれた場面でたびたび心理・感情の葛藤を抱える傾向があることや、その心理・感情の機微や抑揚について十分に理解しておく必要がある。

5. 等身大のミドル・レベルの生徒が必要とする助言とは一大人が学ぶべきこと

次に、もう一つ、別の資料を取り上げよう。7年生（注21）の生徒、「ノア B.」が書いた詩（注22）である。ノアの詩からは、ノアが学校での人間関係、友人関係に不安と葛藤を抱えていることがわかる。また、詩では自分自身をうまくコントロールできないことへの苛立ちも表現されている。しかし、そうしたやりどころのない感情の起伏から自分を助けてくれたのが、歴史の先生だったことをノアは詩の中に書き綴っている。また、真実から何度も逸脱してしまいそうになるノアに、歴史の先生は「きまぐれになってはいけない」、「深刻になりすぎてはいけない」と、ノア的心情に寄り添った言葉をかけてくれたと語られる。ノアは、そうした大人からの助言や働きかけによって、「真実」を語ることの大切さについて自ら気づいていく。ここで、大切なのは、決してノアを否定することなく、真実のままでよいのだ、と確信をもって励ます先生の揺るぎない姿勢である。しかも、大人が一方的な結論を与えるのではなく、対話を通して自ら気づかせるような助言を与えることで、ノアは真実とは何かということに気づき自信を取り戻していく。自分のことを心配してくれる大人がいる。失敗して動けなくなっている自分を受け入れ、話を聞いてくれる大人がいるという心強さが、ミドル・レベルの子どもを再び立ち上がらせ、前へ踏み出すきっかけをつくる結果につながっている。ノアの詩はそうしたことがわかる詩である。

心細くなり自分自身がわからなくなってしまうノアに勇気を与え前向きな気持ちに回復させたのは、偽りのない大人の態度や余裕をもって語りかける大人の言葉かけである。そして、子どもと共に耐えながら粘り強く向き合ってくれる大人の存在である。ノアの詩は、「ミドル・レベルの生徒たち」とは、そのような大人との出会いによって支えられ成長が促される存在であるという一つの例示である。また、この詩で語られ表現されているのは、子どもへの向き合い方に成功した教師の教育実践の一事例である。しかし、現実問題として、教師であれ、親（保護者）であれ、すべての大人がこのように思慮深く、我慢強く、子どもと接することができるのかといえ、実際には多くの場合、それは容易なことではない（注23）。教師のみならず、子どもにとって最も身近な大人である親（保護者）を含め、ミドル・レベルの子どもの成長を支える大人たちが、子どもたちとの日常の向き合い方を考えてみる際に、ノアの詩は一石を投じるものといえる。

ありのままの・・・私

ノア B. （7年生） 作

彼は私に大切な考え方を示してくれました

それは「TRUE 真実（本当のこと）」を語るということです

靴下と靴のように、しっかり寄りそって

私の歴史の先生は、私をずっと助けてくれました

きまぐれになってはいけない

深刻になりすぎてはいけない
彼は私に言いました
彼はあなたに言いました

ただ真実のまま
いれば良いのだと
君が今やろうとしている
真実だけに
意味があるのだと

それは彼が私に期待していたことです
それは彼が未来にあなたに期待することでしょう
耐えること、それは、未来に、彼があなたのためにすることでしょう
あなたのことを嫌っていた者たちから
彼はあなたを守ってくれるでしょう
彼は私に示してくれました
私をいじめた者たちから
私は「**FREE**（自由であること、解放されている）」であると

彼があなたに何か目新しいことを教えてくれるとき
あなたの脳は、熱狂することでしょう

彼はあなたの友人になることができる、これは大切なこと
もしも、あなたがまだ感謝の気持ちを伝えていないならば
それを伝えることを、どうか忘れないでください
遠い存在だけれども、めったにいない数少ない先生に
いつも **TRUE**（真実）でいてくれる先生に
ありがとう、と言うことを

最もすばらしい、そして最も信頼できる
めったにいない先生たちに

6. 2021年に発行されたミドル・レベル教育の新指標

以上、1. から 5. を踏まえて、6. では、2021年に発行されたミドル・レベル教育の新指標について見ていくことにする。

AMLEによれば、成功するミドル・スクールに不可欠な5つの属性とは、次に掲げる18の特徴を通して実現され達成される、としている。*This We Believe*（2021）の中で示されたミドル・レベル教育の新指標、ミドル・レベルの学校を成功させるための条件とは、次のとおりである（注24）。

「成功するミドル・スクール : 私たちの信条」

必要不可欠な属性 5項目

ALMEは、10-15歳の青少年の教育とは、次に掲げる5項目であると確信します。

- ・ 応答的であること（注25）

学校に関するすべての決定の基礎として、10-15歳の生徒たち特有の性質とアイデンティティ（注26）を用います。

- ・ 挑戦的であること

学校コミュニティを構成する一人ひとりのメンバーに高い期待を育み、学習を促進します（注27）。

- ・ エンパワー（力を与えること）

生徒が自分自身の学習に責任を持ち、彼らが自分の周囲の世界に積極的に貢献するための環境を促進します（注28）。

- ・ 公正かつ公平で理にかなっていること

すべての生徒を対象として社会的に公正な学習の機会と環境を提供します（注29）。

- ・ 責任をもって関わらせること（注30）

すべての生徒にとって差し迫った問題を扱い、参加型かつ能動的に、やる気を起こさせる学習の雰囲気（注31）を育てます。

AMLE ロゴ 吹き出し

ウェブ上の AMLE のサイトにアクセスして「必要不可欠な属性と特徴」の PDF プリントを入手してください（注32）。

特徴

成功するミドル・スクールとは、次の 18 の特徴を示します（注33）。

- ・ 文化とコミュニティ

- 教育者は、10-15歳の青少年に対し敬意をもって尊重します。
- 学校環境とは、誰に対しても快く受け入れ、包括的で肯定的なものです。
- すべての生徒にとって、学問的発達、個々の人格的な発達は、大人の擁護や支援によって導かれます。
- 学校の安全は、積極的に、正当に、思慮深く対処されます（注34）。
- 総合的なカウンセリングと支援サービスが、10-15歳の青少年のニーズを満たします。
- 学校は、尊重すべきパートナーとして家庭と関わります。
- 学校は、コミュニティやビジネスパートナーと助け合い、あらゆる活動を実現します。

- ・ カリキュラム・指導・評価

- 教育者は、10-15歳の青少年を教える準備をする際、具体的な内容エリアについて深く掘り下げて研究し、それを教育者自身が自分のものにしておきます。
- カリキュラムは挑戦的かつ探求的、そして統合的であり、多様性を持っています。
- 健康、ウェルネス、そして社会的・感情的な能力は、カリキュラムや学校全体で取り組むプログラム、さらには、それに関連する学校のポリシーのなかで学ぶことができるように支えられます。
- 指導を通して、活動的で目的をもった民主的な学びを育てます（注35）。
- 多様かつ継続的な評価は、学習成果を測るだけでなく、学習そのものを発展させます。

- ・ リーダーシップと組織

- いかなる決定もすべての利害関係者によって開発され、共有されたビジョン

(見通し)に基づいて助言・指導されます。

- ポリシーと実践は、生徒を主体とし、偏見がなく、公正に遂行されます。
- 指導者は、生徒たちととことん向き合い、10・15歳の青少年についての知識が豊富であることが求められ、公正な実践と教育的な調査に熱心に取り組みます。
- 指導者は勇気と協同の見本となっています。
- すべてのスタッフにとっての職業上の専門的な学びは、今日的に意義のある問題を扱い、長期的に実施されるものであり、実際の業務の中に埋め込まれています。
- あらゆる組織的な構造をもって、目的ある学びや意味のある関係性が育まれます。

以上が、2021年に発行されたミドル・レベル教育の新指標である。

内容に関する主な構成要素としては、先述のとおり「教育に必要不可欠な属性5項目」と「18の特徴」から成る。「教育に必要不可欠な属性5項目」は、*This We Believe* (2010)と比べて、いずれもさらに発展的で具体的な記述になっている。その詳細についてはそれぞれ本稿末尾の注に分析を記載した。また、2021年の新指標では、特徴18項目については3つのカテゴリーに分けられている。その筆頭が「文化とコミュニティ(7項目)」であり、二番目に「カリキュラム・指導・評価(5項目)」、三番目に「リーダーシップと組織(6項目)」という順で提示された。これに対して、*This We Believe* (2010)では、その提示順序が異なっている。2010年の旧指標では、一番目が「カリキュラム・指導・評価(5項目)」、二番目が「リーダーシップと組織(5項目)」、三番目が「文化とコミュニティ(6項目)」という順序での提示であった。このように新指標においてその提示順序が変更されたことは、かつての旧指標とは異なる、新しい時代に即応したミドル・レベル教育像が明らかに打ち出されたことを意味している。2020年のパンデミックが始まるおよそ10年前の*This We Believe* (2010)では、学校と「文化とコミュニティ」との関係性の構築については、すでに打ち出されていたものの、ミドル・レベル教育の中心を成すものは、まだ「カリキュラム・指導・評価」、つまり「学校」空間にあった。なぜならば、2010年版のミドル・レベル教育の旧指標では、学校を「主体」として、学校は文化やコミュニティと“関わる”、“招き入れる”というスタンスが鮮明であったし、学校を開放することでコミュニティのすべての者を包み込み支援するという立場が強調されていた。つまり、文化とコミュニティは、学校のカリキュラムに「巻き込む」対象であって、あくまでもそれは「学校」とは一線を画するもの、つまり「客体」として捉えられていた。

ところが、2021年版の新指標では、子どもの居場所、教育者の居場所も含め、学びのフィールドは、学校のみならずコミュニティであるという認識が一気に強まっている。2010年版の旧指標では、コミュニティは、学校が働きかける存在であり、働きかけなければ動かない(応答しない)存在として認識されていたのが、2021年版では、学校とコミュニティには一線を画するような隔たりや境界はなく、むしろ融合的かつ同格的な関係として認識されるようになったことがわかる。そういう意味で、両者は相互に協同する身近な存在として、また、相補的に高め合うことのできるもの同士として位置づけられるようになったといえる。しかしながら、この変化は、どのようにしてもたらされたのだろうか。それは、パンデミックを契機として、世界中のあちこちで差し迫った危機感が広がり、学校もコミュニティも互いに協同しながら危機を乗り越えていかねばならない存在としての現実に直面したことによるといえるだろう。たとえば、かつてのように、学校単位、職場単位でそれぞれが単独に活動を遂行・決定していくような方法では、今や社会が機能しなくなってきたことが挙げられる。こうした状況は、学校でのカリキュラムや学習内容に影響を与えている。予め決められた学習内容だけを学びの中心と捉えるのではなく、実社会やコミュニティとの関わりを通し

て子ども自身が問題を発見する探求型の学びや体験に基づく学びが、子どもの成長を支えるものであることが実感として認識されるようになってきた。

2010年版の旧指標では、単に「アクティブ・ラーニング」を推奨し、「多元的な学習アプローチ」や「多様で継続的な評価」といった学習指導形態に関する、どちらかといえば漠然とした目標が掲げられていたのに対し、2021年版の新指標では、「健康、ウェルネス、社会的・感情的な能力」といった、目下、渦中の喫緊の課題とミドル・レベルの子どもの特性に配慮した「テーマ性」が強調され、より具体的なカリキュラムづくりやプログラムの図像づくりの推進が目標として掲げられている。この点に関して、2010年の旧指標から2021年の新指標への変化は、これまでと同じ方向性を維持しつつも、より具体性を帯びた形で、コミュニティや社会との強い結びつきを必須とする実践的で高度な学びが展望されるようになったと分析できる。

以上、2021年に発行された新指標の18項目について、「新時代に即応する」という観点から、それらがどのようなものへとシフトしてきているのかについて分析・評価を行なった。この考察を通して、パンデミックを契機として、ミドル・レベル教育の目指す内容や方向性にいかなる変化や具体性が表れているのかを見てきたが、AMLEが示したこの新指標は、あくまでも、これからのミドル・レベル教育が目指すべき方向性を示した案内地図のようなものである。これを実践するためには、本稿の前半部分で検討した、教育実践を軌道にのせるための前提条件の整備や、等身大のミドル・レベルの生徒たちをまず理解するということが欠かせない。しかしながら、等身大のミドル・レベルの生徒とは、本稿で抽出・検討した、アンビバレンツな心理傾向という特徴を取り上げるだけですべてが説明できるわけではない。たとえば、ミドル・レベルの生徒たちが夢中になる若者文化、彼ら特有の信念や価値、規範などにも十分に理解を深めておく必要がある。*This We Believe* (2021)では、ミドル・レベルの生徒たちが、今日、デジタルワールドの中で、言語、音楽、ファッションなどあらゆる表現形式を用いて何かを活発に伝えようとしていることに注目していくことの大切さについても触れられている（注36）。新しいメディアの発達によって露呈されるミドル・レベルの生徒像とはどのようなものか、彼らのアイデンティティの発達や確立という文脈ならびにミドル・レベル教育の歴史的な視点から、ミドル・レベルの生徒像を再び捉え直してみることは、筆者の今後の課題としておきたい。

7. むすび

「成功するミドル・スクール」—これは、*This We Believe* (2021)の主題である。この本の編著者は、2021年版のこの本の中における“ミドル・スクール”とは、単にミドル・スクール (middle school) と文字どおり命名された学校を指すだけでなく、中学校 (junior high school) はもとより、上級小学校 (upper elementary school)、中間学校 (intermediate school)、下級中等学校 (lower secondary school) など、あらゆるミドル・グレイド「中間段階」の学校をも含みこんで“ミドル・スクール”と見なしていると明言している。そして、さらには、今やそうした学校がヴァーチャルである可能性もあり、ヴァーチャルな環境で学ぶミドル・グレイドの学校もまたミドル・スクールに含むものとして視野に置いていると言及している（注37）。

パンデミックを契機として、さまざまなデジタルツールやシステムが発達する今日、日々報道される地球規模の情報や映像から、社会にはさまざまな問題があり、社会は多様な人々で構成されているということが、これまで以上に強く鮮明に印象づけられるようになった。そして、日々溢れんばかりに発信されている情報は、自分たちの周囲で起こっている問題に類似している、どこかで繋がっているということに世界の多くの人々が気づくきっかけにもなっている。社会にはさまざまな矛盾が存在していることを認識し始めるミドル・レベルの生徒たちは、まさにそうした社会の問題

と自己の関心との結びつきに敏感である。ミドル・レベル教育の実践は、過去 60 年の歴史の中で重ね重ね議論され改善の道筋が探求されてきたが、その発端から最も重要な考え方の一つとされてきたことは、「応答的なミドル・スクール」を創るということである。それは、社会の矛盾、自分自身の中で起こっている矛盾に葛藤するミドル・レベルの生徒たちの成長を支援する決定的なアプローチといえる。また、ミドル・レベルの実践研究において、生徒の活動に自治性や所属性、競争、アイデンティティに焦点を当てる機会を増やした結果、ミドル・レベルの生徒の成長に好ましい効果が表れることがこれまでにわかっている（注38）。そうした結果を土台から支えているのが、かつてからミドル・スクールの実践で力点が置かれてきた「助言システム」である。本稿で取り上げた詩の作者、ノアも、こうしたシステムに支えられ、成長した生徒の一人といえる。助言システムとは、どの生徒にも学校の中に、個々の生徒の学問的および個人的な成長を支援する、助言者としての役割を果たす大人が一人以上存在するという、学校組織上の生徒支援システムである。ここで言う「助言者」とは、カウンセラーとは別ものである。助言者は、生徒たちの学校生活の浮き沈み、学校生活で起こる良いこと、悪いことを経験する生徒たちの声に耳を傾け、彼らが進むべき方向性を、生徒とともに考え励まし案内する役割を担うスタッフである。助言者は、適宜、生徒の家庭との連携や調整役も担い、ミドル・レベル教育の専門知識や経験が豊富であることが求められる（注39）。

学校の中で、大人がこうした役割を適切に担うためには、まず大人自身が、社会の中で起こっている偏見から解放され、自分自身を正しく認識し、社会で機能する適切な判断力を身に付けておく必要がある。そして、助言者となる大人は積極的に学ぶ学習者としての要素も不可欠である。このようにして培われる大人の側の心の豊かさや穏やかさは、子どもを理解し、子どもと対話していくためには欠かせない素養となる。本稿、3. でも取り上げたように、ミドル・レベル教育の改善とは、子どもを支援することに徹するだけでは機能しない。教師をはじめとする、大人たちの学習機会をつくっていくこと、大人たちがともに学び合える場をつくっていくことを通して、大人のケアを行うこともまたミドル・レベル教育の重要な課題となっている。長期化するパンデミックのさなか、AMLE は、ミドル・レベル教育を支える大人たちに対しても助言的な役割を担う「応答的な」存在として、その組織の立ち位置を広く社会に発信している。それは *This We Believe* (2021) を通してのみならず、自らの組織のホームページからの情報発信や、アメリカ各地で行われる年次大会、近年では数々のオンライン学習会（ウェビナー）を開催するなど、新しいさまざまな手段を用いて大人の学習機会の創造にも貢献している。新しい時代のミドル・レベル教育がどのような様相を呈していくのかは、さらに今後を注視していく必要がある。

注

注1 ミドル・レベル教育協会（AMLE）は、2020 年、パンデミックが始まった矢先、直ちに遠隔学習リソースを、インターネットにアクセスする世界中のすべての人が使用できる形にして自らの組織のホームページに掲載した。そして、パンデミック下の緊急的な学習継続措置として無料で利用できる遠隔学習を推奨した。これに関する詳細は、次の拙稿を参照されたい。

岡村千恵子・岡村慶、「2020 年新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策期がもたらす学習観のパラダイムシフト—全米ミドル・レベル教育協会（AMLE）が推奨する遠隔学習リソース：「芸術」主題に着目して—」、『高知大学学術研究報告』第 69 号，2020 年，15-26 頁。

注2 アメリカでは、ミドル・スクール運動が盛んに展開される中で、1973 年、大学教授やミドル・レベル教育に携わる教師たちによって全米ミドル・スクール協会（NMSA）（現、ミドル・レベ

ル教育協会（AMLE）が設立された。この教育協会の趣意文書（ポジションペーパー）である *This We Believe* の初版は 1982 年に初めて出版された。その後、この趣意文書は 1995 年、2003 年、2010 年と 13 年～7、8 年ごとに改訂され、その内容の刷新が図られてきた。本稿でとり上げる 2021 年版の *This We Believe* (2021) は、2010 年版の *This We Believe* (2010) から 11 年ぶりの改訂出版である。初版から数えると、*This We Believe* (2021) は 5 回目の改訂版である。（Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *The Successful Middle School; This We Believe*, Association for Middle Level Education, 2021., p.67.）

注3 *This We Believe* (2021) では、「成功するミドル・スクール：私たちの信条」と題して、ミドル・レベル教育を改善へ導くための教育実践上の留意事項を列举し要点整理したものを総括的に取り上げ提示している。本稿では、*This We Believe* (2021) で公表された、それら最新の留意事項を「新指標」と呼ぶことにする。また、この呼び方に則り、*This We Believe* (2010) で公表された同、留意事項を本稿では「旧指標」と呼ぶことにする。この「旧指標」については、次の拙稿に図表化したものを「第 1 図」として翻訳掲載した。

岡村千恵子・岡村慶「21 世紀を展望するアメリカのミドル・レベル教育—全米ミドル・スクール協会（NMSA）からミドル・レベル教育協会（AMLE）への転換点に着目して—」『高知大学学術研究報告』第 67 巻、2018 年、5 頁、第 1 図。

注4 *This We Believe* (2010) では、10～15 歳の子どもの教育（＝ミドル・レベル教育）に必要な不可欠な条件として 4 項目が示されていたが、最新版 *This We Believe* (2021) では、新たに条件が一つ追加され 5 項目が示された。また、それらミドル・レベル教育に必要な不可欠な条件を支える特徴として、2010 年版では、16 の特徴が示されていたのが、2021 年版では 18 の特徴が示されることとなった。本稿では、適宜、旧指標と見比べながら、2021 年版の新指標について確認し議論する。

注5 世界保健機関（WHO）は、2020 年 1 月 30 日、新型コロナウイルス感染症について、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」を宣言した。その後、世界的な感染拡大の状況、重症度等から 3 月 11 日新型コロナウイルス感染症をパンデミック（世界的な大流行）とみなせると表明した。

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/2487-idsc/idwr-topic/9669-idwrc-2021.html>（国立感染症研究所） 2022 年 9 月 21 日閲覧。

注6 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）WHO 公式情報特設ページ、参照。

https://extranet.who.int/kobe_centre/ja/covid 2022 年 9 月 21 日閲覧。

注7 奥山純子、門廻充侍「コロナ禍長期化における児童・青年の身体活動とメンタルヘルス」、『ストレス科学研究』、公益財団法人パブリックヘルスリサーチセンター、2021 年、36 巻、3・11 頁、参照。

注8 奥山純子、門廻充侍、同上書、4 頁。

注9 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *The Successful Middle School ; This We Believe*, Association for Middle Level Education, 2021., p.1.

注10 AMLE（という団体）の代表として、CEO（最高経営責任者）のステファニー・シンプソン（Stephanie Simpson）氏が序論を執筆している。

注11 「この出版物」とは、*This We Believe* (2021) を指す。

注12 原文では、young adolescents であり、それは「ミドル・レベルの生徒たち」を指している。

注13 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, p.1. cf.

注14 「7年生」とは、日本の学校制度の学年でいうと「中学1年生」相当である。

注15 この添え文にある「私」、つまり、ムハメッド A. を傍観している人物が、誰かについては、原典において特に言及はないが、この描画が掲載されている見開き次頁に AMLE の CEO (最高経営責任者) のステファニー・シンプソン (Stephanie Simpson) の執筆による序章が配置されていることから、添え文にある「私」はシンプソン氏であると思われる。(Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, p.1. cf.)

注16 「思春期」とは、子どもが大人へと成長するための移行期間を指し、性的成熟の始まりで定義づけられる。よって、男女差、個人差がある。女子では12歳以前の小学生の時期に7割が初潮を経験しているのに対し、男子の射精が同じぐらいの率に達するのは15歳ぐらいである。(無藤隆・佐久間路子編著、『発達心理学』, 学分社, 2008年, 8-9頁, 参照.)

また、「思春期」が意味する該当年齢を調べてみると、その年齢範囲には諸説がある。例えば、医学などの分野では、思春期とは「8歳頃から17, 18歳頃までの時期に相当」とする見解もある一方で、教育の分野では「思春期は11才前後から始まり、18才頃まで続く」とする見解がある。さらに、思春期とは、(以前は19歳で終わると考えられていたが,) 最近では「10歳から24歳まで続く」というオーストラリアの研究が近年英国の医学誌に掲載されたとするニュースも報道されている。<https://www.bbc.com/japanese/42742814> (BBC ニュースジャパン) 2022年9月21日閲覧。

注17 「両価性は思春期を考えるキーワードのひとつ」である。「両価性とは、例えば些細なことで母親を罵ったり壁を殴ったりしていた子どもが、ほんの数分後にはベタベタと甘えた仕草を見せるといった、一見矛盾した態度」のことを言う。また、思春期は親からの自立と親への依存の間で揺れる時期なので、両価性が高まる
<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-03-002.html> (厚生労働省 e-ヘルスネット 健康情報サイト) 2022年9月21日閲覧。

注18 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, p.2. cf.

注19 これを日本の学校場面に置き換えて想像してみるとすれば、小学校を卒業して中学校に入学する、中学1年の生徒の4月初日の中学校登校時の複雑で不安な緊張した心理と概ね同等のものと解釈できる。

注20 「少なくとも」と記述したのは、ローヤは、実在する固有の6年生であり、学校生活の他、家庭生活、社会生活という現実的なさまざまな生活実態を持っていると考えておく必要があるからである。ローヤの不安感はずしも学校生活からのみ引き起こされるとは限らない。学校生活以外のところからも常に何らかの影響がもたらされていることは考慮に入れておかねばならない。

注21 「7年生」とは、日本の学校制度の学年でいうと「中学1年生」相当である。

注22 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, p.10. cf.

注23 小野善郎『思春期の謎めいた生態の理解と育ちの支援—心配ごと・困りごとから支援ニーズへの展開—親・大人のできること』福村出版, 2020年, 3-197頁。小野善郎『思春期の子どもと親の関係性 愛着が導く子育てのゴール』福村出版, 2020年, 3-195頁。

注24 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, pp.8-9. cf.

注25 *This We Believe* (2010) では、「発達的な側面への応答」と限定性をもって記載されていたが、新指標 (2021) では「発達的に」という限定性が取り除かれた。

注26 *This We Believe* (2010) では、単に「素質 (nature)」を用いるとされていたのが、新指標

（2021）では「素質とアイデンティティ（nature and identities）」へ文言が変更された。どの個人も社会的な状況との関わりはそれぞれに異なるものであることへの配慮が加わったことがわかる。

注27 *This We Believe*（2010）では、すべての生徒が学ぶことができ、高い期待をもっているものと「認識すること」と、生徒に限定した上で観念論的な表現が用いられていた一方で、新指標（2021）では、生徒のみならず、学校コミュニティを構成する一人ひとりのメンバーに高い期待を「育み」、学習を「促進します」とされ、学習対象をより広げる表現が導入された。また、観念論から抜け出し、能動的な実践論が目指されるようになった。生徒だけでなく、コミュニティを構成するメンバーすべてがその視野に置かれることで、学校という場や教室空間のみならず、実社会を想定した実践論がいつそう鮮やか想定されるようになった。

注28 「エンパワー（力を与えること）」に関しては、*This We Believe*（2010）では、「すべての生徒に彼らが生きていく上で必要な、自己の生活をコントロール出来る知識と技術を提供すること」、つまり、単に基礎的な力を「授ける」ことの重要性が強調して説かれていたのに対し、新指標（2021）では、生徒が自分自身の学習に責任を持つことを第一義的な目標と掲げ、生徒は、自分の意志で能動的に生きていく存在であるというビジョンが鮮明に打ち出された。その上で、生徒が自分の周囲の世界に積極的に関わり貢献できる環境づくりが目指されるようになった。また、それを「促進する」のは大人であるとされ、大人の役割や使命も同時に明確化された。

注29 「公正かつ公平で理に適っていること」については、*This We Believe*（2010）では、「すべての生徒の学ぶ権利を保障し、挑戦する機会と生活に密接に関わる学習機会を与えること」とされていたのが、新指標（2021）では、「すべての生徒を対象として社会的に公正な学習の機会と環境を提供します」と、表現が簡明化された。つまり、新指標では「学ぶ権利の保障」は、すでに当然の前提として捉えられるようになったことを意味している。

注30 5つ目の項目、「責任をもって関わらせること（原文では、Engaging）」は、新指標（2021）で初めて登場した項目である。*This We Believe*（2010）には、この項目はなかった。

注31 生徒自身の動機づけを重視し、自ら学習へ向かう姿勢を生み出す雰囲気が目指されている。

注32 新指標（2021）では、AMLEのロゴの吹き出しをアイコンとして掲載し、インターネットへのアクセスによる情報入手を促している。ウェブ上で、ミドル・レベル教育の新指標（2021）を（無料で）配布しているので、印刷してほしいとのことが強調されている。

注33 *This We Believe*（2010）では、「16の特徴」であったのが、新指標（2021）では「18の特徴」となった。

注34 この一行は、新指標で初めて付け加えられた。新指標（2021）で「学校安全」を独立した項目として扱うようになったのは、COVID-19の危機に直面し、学校現場が常に安全の確保のために公正で迅速な思慮深い対処が迫られるようになったことと大いに関係している。

注35 2010年版の旧指標では、「アクティブ・ラーニング」という学習・指導形態を示す漠然とした言葉で記述されていたのが、2021年版の新指標では「民主的な学び」という具体的な概念の提示、記述がなされるようになった。

注36 Penny A. Bishop, Lisa M. Harrison, *op. cit.*, pp.11-12.

注37 *Ibid.*, p.3

注38 *Ibid.*, p.6.

注39 *Ibid.*, pp.15-16.

令和4年（2022）10月28日受理

令和4年（2022）12月31日発行